

2023 年度 帰国隊員支援プロジェクト 実施完了報告書
(協力活動) 調査・研究)

提出日:2024 年 10 月 27 日

氏名: 加藤 菜穂

プロジェクト名称:ラオス人民民主共和国における若者への縫製
技術訓練を通じた収入向上プロジェクト

実施国:ラオス人民民主共和国

実施期間:2023 年 08 月 01 日～2024 年 08 月 31 日

1. 活動実施内容概要

1-1. 活動目的

JICA 海外協力隊での活動においてラオス地方の織物生産者と関わる中で、織物(布)という素材を活かし、価値を高めて産業の持続性や現金収入につなげることが必要だと感じた。

帰国後、「手工芸品生産で生計を立てるために十分な収益を上げる」ことへのアプローチとして、ラオスにて高付加価値製品を生産し、日本で販売する siimee というアパレルブランド事業を 2021 年 3 月より立ち上げて活動している。ラオスの伝統的な手法で生産される手織物を素材とし、ラオスで縫製指導を行い、製品を生産することで、「made in Laos」の製品が日本を中心とした国外市場で通用するようにすることで、ラオス人の自立的収入向上を目指すことが、私たちの活動の主目的である。

本プロジェクトでは、協力隊終了後に首都ビエンチャンで準備していた縫製拠点の強化を行い、①日本を中心としたラオス国外市場に適合する製品の品質水準向上②安定的な高品質体制の構築を目的としながら、ラオスの織物産業に関わる若者や、ラオス国内で必要な収入を得られる若者を増やしていくことも目指している。

1-2. 活動内容

時期	場所	内容
＜生産体制の構築準備＞		
2023 年 8 月	兵庫県養父市	元 JICA 海外協力隊ラオス派遣デザイン隊員(出張当時、養父市地域おこし協力隊員)との協議 ・協力隊活動で縫製にも関わっていたため、ラオスにおける縫製の課題やその対応策などを協議。 ・現在の養父市での活動を見学。地域の素材・伝統を活かした製品づくりや場所づくりについての知見を得る。
2023 年 09-11 月	ラオス・ビエンチャン	・訓練対象となる候補者を検討。候補者に対し、借用設備での縫製トレーニングを段階的に実施。 ・協業先候補(SAYA Brand, Le Lao)との打ち合わせ実施。 ・導入設備(ミシン)の検討。設備購入先候補を選定、見積入手。

2023 年 12 月 -2024 年 02 月	東京	協業先候補である SAYA brand とのオンライン MTG を実施。 ラオスにおける組織・チームの作り方や縫製賃について相談。
2024 年 2 月		設備ミシン1台(直線縫い)の購入。(3 月渡航時すぐに使用できるようにするため。SAYA Brand に仲介依頼)
＜ラオスでの品質教育および縫製訓練＞		
2024 年 03- 05 月	ラオス・ビエン チャン	SAYA brand(2 週間)および Le lao(1 ヶ月)の場所を借り、 対象者 3 名に縫製および品質指導実施。 設備ミシン 1 台(ロックミシン)、裁ちばさみなど、その他備 品の調達・導入。
2024 年 06- 07 月		日本から遠隔での縫製依頼。日本へ配送してもらい、品 質の確認。
＜今後の対策検討・縫製関連の資料準備＞		
2024 年 6 月	愛知県名古屋 市	元 JICA 海外協力隊ラオス派遣コミュニティ開発隊員(織 維製品品質管理士保持者、現富山県和紙工房勤務)との 協議 ・品質管理の仕組み構築について相談。(検品基準の作 り方、検品の進め方について等)
2024 年 7-8 月	東京	実施後の課題抽出、成果確認、課題に対する対策の立 案。 これまでの傾向を踏まえて、対象者に向けた縫製関連の 資料の製作。品質基準の明確化。

2. 活動の結果・成果

総括としては、プロジェクト内で、アプローチ目標としていた4つの項目のうち、1, 2, 4は、一定の成果が認められるが、3・4の項目については課題が残るため、2024 年 10 月より、体制の再構築・改善策を実施する。

<アプローチ目標>

1. ラオス人縫製士の日本の品質基準の理解
2. 体系的かつ理論に基づいた縫製技術
3. 安定的な品質を担保するための生産体制の構築
4. 高品質の製品生産のための設備不足

以下に、各項目についての結果を記述する。

2-1. ラオス人縫製士の日本の品質基準の理解

縫製・品質指導以前は、製品の細部の仕上がり、特に服の「内側」の仕上がりに関して、品質の低さが見受けられた。具体的には、内側の細部の滑脱や、ミシン糸と生地の色の違い、チャコペン（印）が残っているなどの課題があった。

しかし、日本で求められる「品質」とは、表面的な部分だけではなく、細部の正確性や見えないところの美しさである。また、数年間使い続けることができ、洗濯機でもほつれない耐久性も求められる。そのため、細部に「品質」の低さがあれば、それだけ、日本にある他のブランドと、マイナス要素としての差が生まれ、結果的に価値を高めて販売することが難しくなる。

このような日本で求められる品質基準は、ラオスで求められる品質基準と、大きく異なるため、ラオスの縫製職人は理解に時間を要したが、日本で求められる品質基準を満たしていないことによる問題点を何度も伝えること、そして、何がエラーで何が許容できるのか基準を明確にして、ラオスの縫製職人にとってわかりやすくなるよう写真などを使って指導を行った。結果的に、品質に対する意識は大きく変わり、細かいことであっても不明点などを都度自らが確認するなど、「品質」の認識が高まった。

2-2. 体系的かつ理論に基づいた縫製技術

本プロジェクト実施以前は、ラオス国内で行われる一般的なレベルの縫製技術のみを使って縫製を実施していた。また、対象者はいずれも、縫製はできるものの、専門的な訓練は受けておらず、知人から学んだ程度であった。

一般的には、縫製の専門知識を持っている人でも扱いが難しいラオスの手織り布を縫製するにあたり、プロジェクト以前の縫製技術では、品質の担保がより難しくなる。そのため、各種日本式の縫製方法の指導を行った。実際の商品の製作を、練習用の布で縫うところから始め、その後本番の布で縫うという工程を繰り返し、その中で技術を習得してもらった。

なぜその工程・縫い方が必要なのかという点を理解してもらうことを目指して指導を行ったこと、かつ効率が良い手順を考えてもらうような指導を実施し、対象者は自身で判断ができるようになったことが成果だと考えられる。

(詳細内容は、プロジェクト報告書参照)

2-3. 安定的な品質を担保するための生産体制の構築

縫製指導と合わせて、品質指導を行い、その中で品質を担保するための生産体制の構築のため、一定の手順のルールを設けて行ってきた。

当初は、縫製直後に私が完成品の確認をし、基準に適合しない部分についてはラベルシールを貼り、その場で伝えて直してもらうという方法を行った。縫製着数を重ねるにつれ、適合しない箇所は減少した。

一方課題が残った点もある。私が日本に帰国後のタイミング(2024年6月)で、縫製の依頼を行ったところ、縫製職人1名の生産品の最初のステップでエラーが発生しており、依頼したすべての生産品が検品で不適合となった。これは、縫製前のマシン調整不備に起因するものであり、縫製職人たちのみで、自走できる体制の構築というところまでの成果とはならなかった。今後、2024年10月より、品質管理体制の再構築を実施している。

2-4. 高品質の製品生産のための設備不足

本プロジェクト実施以前は、縫製職人たちは、中古品の古いマシンなどの設備を使っていたこともあり、縫製を始める前の段階でのマシンの調整手順などを適切に行ったとしても、縫製のエラーが発生してしまう現象が起きていた。そのため、縫製・品質の指導を行っても、日本で求められる品質基準のものを作るのに手間と時間を要していたし、縫製のやり直し作業も多々発生していた。今回、直線縫いマシン1台、ロックマシン1台を導入し、新品のマシンを使うことで、安定した品質の製品を生産することができるようになった。

製品の品質を担保できるだけでなく、縫製職人が縫製・品質指導を受けた際に、設備の調子に困らないため、自身の技術の向上を感じることができ、縫製職人たちにとっての意識向上にもつながった。その点においても、設備の導入は良い影響を与えてくれた結果となった。

一方、ラオスにおいては日本メーカーのマシンは市場に出回っておらず、中国製のマシンが主である。中国製の中でも安定しているといわれるJACK社製のものを今回は導入したが、品質上問題が発生しないかを確認するため、今回の期間中は直線縫い・ロックマシン1台ずつの導入とした。今のところ大きな問題は発生していないが、糸調子の調整不良や目とびがまれに発生するため、今後は日本製の設備導入を検討している。隣国タイでは日本製マシンが出回っているため、タイから輸入する方向で、タイの販売店との相談を進めている。

3. (応募様式に記載した)期待された成果・効果と実際の相違点

異なる場合はその原因と対処内容、及びその対応による結果

3-1.市場との適合性

2024 年 06 月～09 月で、本プロジェクトで指導した縫製職人が生産した製品の日本での販売を実施。それらの製品の品質の高さは、お客様に評価頂いており、日本の市場に適合した品質レベルになっていると言える。また、今回のプロジェクトを通じて技術や品質意識が向上したことにより、現地のデザイナーから、縫製依頼を受けるようになった。そのため、プロジェクト以前よりも、製品の生産数も縫製の仕事も増加しており、縫製職人および、このプロジェクトの先にいる手織物の生産者の収入向上にもつながってきている。縫製職人の一人は、公務員である夫の 2-3 倍(月により変動)ほどの収入を得られるようになった。

現時点では、「ラオスの若者にとって魅力的な職業となっている」というところまでは、断言できないが、今回のプロジェクトで「縫製技術訓練を通じた収入向上」には繋がっており、少なからずその可能性はあると考えている。

3-2. 実際の相違点

品質指導については、現場に指導者がいる場合は、品質を維持することができるが、現場に指導者がいない場合に、縫製職人は品質の必要性を理解はしていても、認識のレベルの相違があるために、縫製の品質エラーが発生してしまうことがある。複数着依頼の場合、1着目にエラーを発生させてしまうと、すべての品質が低下してしまうことがあるため、品質を維持するための仕組みを再構築していく必要がある。

4. 活動成果の持続発展性

本プロジェクトでトレーニングを行ったメンバーのうちの 1 名が、技術の習得や意識の向上が見られただけでなく、現場のマネジメントに近いことも行ってくれるようになったため、今後現場のリーダー的ポジションに十分になりうると感じた。

また、一連のトレーニングを通して、高品質な製品づくりを実現させていくうえで、基準を示すなど、何をどのように伝えたらよいのか、伝えるべきポイントなどの基本をつくることができた。資料化も実現できたことで再現性が担保でき、今後新たなメンバーを増やしていくうえで円滑に教授できる期待を持つことができた。実際に現在 2 人ほど追加で縫製チームに加わってもらう予定があり、今回トレーニングを受けたメンバーを講師的立ち位置として、指導してもらう予定である。

一人一人の特性(得意な点、なかなか理解しづらい点など)があるので、メンバーを増やす

たびに今回つくったものを基礎として、内容を充実させて蓄積していきたい。

5. 苦労した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、それらを今後どのように活かしたいか、教訓等

今回葛藤・苦労した点は、対象人数と持続性のバランスである。対象人数は増やしていきたいため、本プロジェクトの時点で5人程度は訓練対象とできればと考えていた。一方で、「訓練して終わり」ではなく、技術を習得した彼女たちに、持続的に収入を得てもらい、技術を活かし続ける機会を持ってもらう必要がある。

日本側での販路構築も並行して行ってきたが、生産数と日本での販売数のバランスを考えたときに、対象者が継続的な収入を得られるようにすること、技術や意識を確実に定着してもらうことが優先だと感じ、3人を対象とした。

実際本プロジェクト期間、日本滞在時は月に2か所以上展示会やPOPUPを行い、実施後は卸先として継続的に取り扱ってくれる店舗が現在3つほどある状態である。協力隊員として活動中の時にも技術指導の研修を実施したことがあったが、実施後にそれを活かす機会がないことが問題だと感じたため、それを実践しながら進めていけたことがとても学びとなった。

本プロジェクトで感じた生産と販売のバランスを保ちながら、関わる人数を増やしていけたらと思っている。

6. ご自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

直近では2024年10-11月にラオスを再訪し、検品から品質管理の流れを再考し、体系化して、品質管理の仕組みを導入している。その際、管理者候補であるラオス人に、品質管理を主とした業務を担当してもらうこと、また縫製職人の一人を現場マネージャーになってもらうべく進めている。

今後は、本プロジェクトで築いた縫製の土台をより安定させ、拡大し、生産できる製品のバリエーションなども増やしていきたい。そしてラオスの村の生産者→首都での縫製→日本または別の国へ届けるという各フェーズを強化したい。特に縫製拠点が安定することで、村の生産者とのテキスタイル開発などにもより力を入れられると感じている。

また、ラオス人デザイナーが、ラオス国内に小ロットで高品質な生産ができるところがないことを課題に感じている。そのような方たちが、本プロジェクトで技術習得したメンバーに依頼できるような受け皿にもなれたらと思っていたが、実際にオーダー実績として、3名のデザイナーから各20着ほど受けることができた。

ラオスの布産業、ファッション産業が発展していくうえで欠かせない縫製を強化するという機会をいただけて、大変感謝している。